

現代のブラジル社会と日系人 デカセギの時代を超えて

首都大学東京・人文社会学部 丹野清人

於：秋篠宮邸 2018・6・8

1 これまでの外国人労働者の受け入れ

- 1990年の入管法改正で別表1（職務内容に応じて発給）のカテゴリーとして研修・技能実習生を、別表2（身分に基づいて発給）のカテゴリーとして日系人の定住者での受け入れを始める。
- 非熟練の労働者(unskilled worker)になるのは分かっていたが、労働者の受け入れではない労働力の受け入れとして始めた。
- 一度始まるや、どちらのカテゴリーも法の改正ではなく、研修・技能実習生の場合は基準省令の改正、日系人の場合は定住告示の改正やその都度の通知・通達を通して、緩めたり・閉めたりしてきた。
- 行政庁による法の運用の段階をコントロールすることで労働市場の需給状況に合わせてきた。

2 二つの日系人（ブラジルの日系人）

- ブラジルの日系人社会は、日本人移民とその子孫に対して用いて、配偶者であっても日本人と血縁のない者については非日系と呼ぶ。
- 世代の呼び方に特徴があり、日本で生まれて社会化も日本で行われた者が一世、日本で生まれても幼少時に渡伯、社会化はブラジルの者は準二世、ブラジル生まれでブラジル育ちの最初の者が二世、二世の子は三世。
- 日本の国籍法の問題もあり、日系人の呼称は戦後（1950年）以降に生まれた。その影響もあり、恒例の者にとっては日系社会 = 日本社会となっている。→ 県人会を支えるのはこの世代。

二つの日系人（日本のブラジル人）

- 1990年入館法改正で正統な地位を受け入れられるようになった日系人の定義は入管法の平成2年法務省告示132号に寄って決められている。
- ブラジルでの日系人と異なって「日系人」は配偶者も含めて日系人と呼ばれ、その分、文化的な意味合いの日系は薄れる。
- 世代の呼称は、日本国籍（日本戸籍登載者）が一世、一世の実子で外国籍の者が二世（外国生まれで出生時に国籍留保すれば一世）、二世の実子と二重国籍の日本人の実子は三世。二世と三世がブラジルでの捉え方と異なる。
- 日本の日系人コミュニティはブラジル人コミュニティとなり、ブラジルでの日系社会 = 日本社会という要素は消え去る。

3 1980年代以降、日本経済に大きなインパクトを与えて来たブラジル人労働者

- 日本にやって来たブラジル人労働者は、休日出勤・残業をいとわず働いたことで、製造業企業のフレキシブルな生産活動を可能にさせた。
- 反面、フレキシブルな生産活動に合わせた生活スタイルが様々な社会問題を引き起こすことにもなった。
- 時間の経過とともに、単なる便利な労働力というだけでなく、長期に製造現場に従事したことにより、今では製造物のクオリティコントロールに欠かせない仕事を任されている者も多く見られるようになった。

通常の作業（吹き付け工程）



ポカ避け



検査



4. 日系ブラジル人はなぜデカセギに向かったのか

- 日本就労が最初に始まったのは1983・1984年ごろから。軍政から民政への移行期のハイパーインフレ期に始まる。
- しかし、デカセギがブームになるのはむしろハイパーインフレが収まってから。→インフレが収まってくるに連れて、日系人の独立自営農・独立自営業のビジネスが行き詰まった。
- 日系人の自営農・自営業は、畑や店舗（店舗の場合はテナントに入って）を得てそれを大きくすると売り払って、より都市・都心に近いところに移るのを繰り返してきた。インフレの時代は、お金を借りてそれをビジネスに注ぎ込んで大きくしている間に、インフレ率が大きいため借金が小さくなっている。不動産を自己所有するよりも、借り物で大きくした方が経済的に魅力（不動産価値はたえず下落してしまうから）。

5. 90年入管法改正の頃に変わる社会的文脈

- インフレが収まってくると、先行して借金してビジネスを拡大する日系人の農業や商業は逆に厳しい経済環境の中に落ち込んでしまった。
- また、インフレの下落 = 貨幣価値の安定は、借りている人よりも貸している人の方が有利な社会環境に変わる。この時期に一気に世界最大の日本人街であったリベルダージのビジネスから日系人が撤退する。（いまやリベルダージで日系人所有のビジネスは池崎（化粧品と日系パレスホテル）と金沢（小さな雑貨屋）のみ。）スーパーやホテルはそのほとんどが客家系中国人に所有されている（ただし、商店の名称は旧来の日本名を使用）。
- 日本就労がブームになるのはこの時期であった。

- インフレ期には、通常レート、商業レート、そして闇ドルの三つの為替相場があった。通常レートと商業レートは国の定めた公定レート。しかし、自国通貨に対するの不信があったから、公定レートとは別の闇ドルがあった。
- この闇ドルがあることによって、日本就労者（デカセギ労働者）は日本で働いた成果をドルに換えて持ち込み、闇で交換することで、手持ちの資金を3倍にも、4倍にもすることができた。→この環境こそが、デカセギブームを形成させた。
- カルドーソ蔵相がリアルプランの名の下で新通貨リアルとドルとのペッグ制を始めると、通貨はドルに裏付けられるようになり、それとともにデカセギで資産を形成することはできなくなった。

6. リーマンショックとブラジル人の大量帰国

- 2008年9月にリーマンブラザーズが破綻し、世界同時不況が始まると、日系人も「ハケン切り」の嵐に巻き込まれる。→2009年4月から2010年3月にかけて厚労省が「失業した日系人に対する帰国支援事業」を行い、国費を用いて帰国を促進した。
- およそ32万人いたブラジル人は5年で18万人台にまで急激に減少した。浜松市などではブラジル人の住民人口はこの間に半減した。→急速な滞日人口の減少は、ブラジル人学校の経営を成り立たなくさせた。その一方、親の収入が下がったことから、ブラジル人子弟の公教育へのシフトが生じた。
- 2008年に300Reaisであったブラジルの最低賃金は2015年には890Reaisにまで上がっている。→ブラジルに持ち帰らなければならない金額もこの間格段に上昇した。もう、本国に何がしかのものを持ち帰るデカセギは不可能になっている。このことがさらにブラジル人の帰国を促した。

7. ブラジル人の大量帰国は何をもたらしたか

- トヨタ自動車、日産自動車、本田技研といった日系自動車メーカーはリーマンショック後にブラジルでの生産能力をほぼ倍に引き上げた。極めて短期間に生産能力を倍増させたが、製造物の品質問題を引き起こさなかった。→デカセギ帰国者たちが機能することでスムーズな経営拡大の資源になった。
- 日本食レストランの多様化と水準の上昇に目を見張るものがある。2000年代初頭までの日本食レストランは形だけの日本食レストラン・すし屋が高額な料金を取っていたが、日本で本物の日本の味に親しんだ者が増えることによって、マズイ日本食が淘汰されるようになった。

- 日本のラーメン店で個人で修行した者が開業するだけでなく、チェーン店がブラジルにも進出する。ラーメン店が増えたのを見越した製麺業者もブラジルに工場を操業させるようになった。
- 牛丼チェーンのすき家といった全国チェーン企業も進出すれば、金沢カレーなどのローカルB級グルメの進出も見ることができ
る。
- 食文化に触発されるように日本文化に対する興味関心の高まりは、マンガの翻訳出版だけでなく、日本の小説の翻訳出版が格段に増えるとともに、それらが街中のkiosk (banca)でも普通に並ぶようになった。

- フェスティバルドジャパンの入場者数の年々の増加、13万人が訪れると予想されていたサンパウロジャパンハウスは1年で77万人が訪れるようになったのも、日本を経験してきた人が身近にいることが大きく関係していると思われる。
- 実際、フェスティバルドジャパンにしる、サンパウロジャパンハウスにしる、来場者の多くは非日系人の人々。しかも、若い年齢層の人々に関心を持たれている。
- 海外における日本語検定試験受験者数もブラジルは断トツに多いだけでなく、受験者数は増加している。日系人が短に存在していることが、日本に対する親近感をブラジル人に与えている。